

中国語の日本語への影響

劉 明
鷺 尾 紀 吉

〈目 次〉

はじめに

1. 漢字伝来の起源
2. 日本文字への影響
 2. 1. 漢字
 2. 2. ひらがな
 2. 3. カタカナ
3. 言葉への影響
 3. 1. 飲食から見る
 3. 2. 習慣から見る
 3. 3. 古典文学から見る
 3. 4. 宗教から見る

おわりに

参考文献

はじめに

文字の誕生は、一つの民族が文明的な時代に入ったことを示す。日本も例外ではない。2000年の歴史をもつ日本は中国と一衣帯水の隣国で、中国の歴史や文化の精髓を吸収し、自分の文字を作った。それによって、日本民族は文明的な時代を切り開いた。文字によって民族の成長、盛衰、発展が行われてきた。このような進化は人間を震撼させた。日本民族はどのように長所を取り、短所を補ったのか、またどのように吸収して、創造と発展をしたのか、本論文で一層の考察を行う。

まず、日本の漢字から論述する。隋唐時代に中日の文化交流は盛んになった。日本から中国への遣唐使や学問僧が大勢渡った。その後、日本は中国の漢字の偏と部首を参照して文字を考案し、自身の民族の言語に相応する文字をもった。いうまでもなく、民族が用いる自身の文字は、民族の歴史、文化、風習など各方面の社会文化の縮図である。日本の文字の使用は多方面で深い影響を受けている。例えば、お茶、仏教、中国の古典文学、風習、習慣、歴史などである。これら文化の影響の下で、ひらがな、カタカナが作られた。

中国の文字や言語も大切な役を果たし、これを通じて文化を伝え、日本が文字を作ったことにより文化の交流を促進した。両国間の文化交流は言語、文字、語彙を通じて実現した。文字や語彙を借りることは、文化の輸入と輸出を反映する。日本は中国文化を吸収したが、それは同時に日本における中国文化の伝えを促進することとなる。要するに、両国間における文字や文化などの輸出と輸入はいずれも民族間の交流と発展を推進したといえる。

1. 漢字伝来の起源

日中両国の“文字”交流史は、後漢の光武中元2年(57年)、漢の皇帝が日本へ「漢委奴国王」と彫られた金印を贈ったことから始まったと広く認識

されており、「史記」によれば、秦始皇帝28年（219年）には徐福が日本へ渡った。また、三国時代には日本の邪馬台国が4回に渡って使節を魏に送り、魏もこれに応え、二回にわたり使者を送っていた。

晋の武帝太康5年（285年）、百済の王仁が「論語」と「千字文」を朝鮮半島経由で日本に伝えた。唐時代、中日文化の交流が盛んになって、日本の推古天皇が630年からその後、遣隋使を派遣、200年余りにわたり仏教文化や中国律令制などを積極的に吸収、その結果、大量の漢字が日本へ輸入された。日本からの遣唐使 吉備真備は漢字の偏と部首を参照して、日本語のカタカナを作った。それから、留学僧 空海が漢字の草体を利用して、日本語の平仮名を創立したという伝説も生じた。そして、日本が自分の文字をもった、文字をもったことにより、文化の伝達に大いに役立ち、また種々の文化の伝播がさらに文字の発展を促進した。

2. 日本文字への影響

2. 1 漢字

漢字は、古代中国に発祥をもつ文字である。中国語を表記するための伝統的な文字である。古代の日本には日本語があったが、それは話し言葉だけで、表記法は何もなかった。古代において漢字は中国から日本へ伝えられ、その形態・機能を利用して日本語の表記にも使われることとなる。そこで日本人は、この便利なものをさっそく取り入れた。この元の中国漢字は、日本の漢字の一種になる。これにより「日本語」というものがもうすでに存在し、日本語の発音や言葉の決まりは中国の発音と違う。日本においては、一つの漢字には多くの異なる発音があることが多い。また、ある発音を持つ漢字が多数あることも珍しくない。

読み方は「音読み」と「訓読み」の2種類に大別される。音読みは、中国語起源の読み方であり、呉音・漢音・唐音・慣用音がある。呉音は、5～6

世紀頃に伝わった漢字音である。通説では、中国の六朝時代南部の呉地方から直接あるいは朝鮮半島を経由して日本に伝わったとされるが、実際には、仏典などに基づく漢音以前の伝統的な読み方が、時代・地域などを考慮されず、まとめて「呉音」とされてきた経緯がある。漢音は、奈良時代から平安時代にかけて盛んに送られた遣唐使（主な渡航先は西北部の長安）や留学僧が、唐の首都の長安で学んだ読み方を輸入した。さらに鎌倉時代から室町時代にかけて、禅僧の留学生の伝来、あるいは民間貿易により「唐音」と呼ばれる読み方が伝わった。このうち最も体系的なのは漢音で『広韻』や『集韻』と対応関係が見られる。慣用音は間違っただけで定着したと分かったものなどを大正時代以降こう呼んでいる。訓読みは、個々の漢字が表す意味を既に存在していた日本語と関連づけることであり、日本語の表記にも用いた。この際の漢字の読み方が、現在の訓読みの起源となっている。「訓」とは、中国においては難解な語をわかりやすい語で説明したり、また古語を現代語で置き換えたりして、方言を共通語で説明するものであるが、日本では中国語は外国語であるため日本語に翻訳することを意味する。外国語であるため日本語の語彙と一対一の対応をするべくもなく、一つの漢字に多くの字訓が作られたが、やがて漢文を訓読みで素読する習慣と相まって、日本語の一語では説明できない微妙な意味合いは切り捨て、一つの漢字にできるだけ一つの訳語をつけるという一字一訓に固定化するようになっていった。これによって日本では漢字に訓読みが生まれ、和漢混淆文を成立させるなど、漢字によって日本語を表記する技術を発展させていった。

日本人が自分たちの言葉を捨てて、外国語である中国語にかえてしまうことはできなかった。中国語の単語を借用し、漢語の造語法に習熟するに従い、和製漢語を造るようになったのである。その造語法をみると、まず、漢字で表記した大和言葉を音読したのがある。例えば、「火のこと」を「火事」、「おほね」を「大根」、「腹を立てる」を「立腹」とする類である。また、中国語にない日本特有の概念や制度、物を表すため漢語の造語法を用いたのがある。「介錯」「芸者」「三味線」などがその例である。

漢語（中国語の語彙）が日本語の中に入り始めたのはかなり古く、文献以前の時代にさかのぼると考えられる。今日和語と扱われる「ウメ（梅）」「ウマ（馬）」なども、元々は漢語からの借用語であった可能性がある。日本で本格的に漢字・漢語が使用され始めた時期は、『古事記』応神天皇条の、王仁が『論語』『千字文』をもたらしたという記述に従えば、4～5世紀の頃である。当初、漢語は一部の識字層に用いられ、それ以外の大多数の日本人は和語（大和言葉）を使うという状況であったと推測される。しかし、中国の文物・思想の流入や仏教の普及などにつれて、漢語は徐々に一般の日本語に取り入れられていった。鎌倉時代最末期の『徒然草』では、漢語及び混種語（漢語と和語の混交）は、異なる語数で全体の31%を占めるに至っている。ただし、述べ語数では13%に過ぎず、語彙の大多数は和語が占める。幕末の和英辞典『和英語林集成』の見出し語でも、漢語はなお25%ほどに止まっている。

2. 2 ひらがな

古代の日本人は、漢字を使って自分たちの言葉を書き表そうとした時、漢字の意味には全く関係なく、音だけを借りて、日本語を書き表しはじめた。一字の漢字を、一音として発音したのだ。いろいろな漢字を用いて「あ」を表していたことが人によって、あった。「あ」を表す漢字として、安、阿、愛、悪などが多く使われたようだ。だんだん整理されて、数が少なくなってくることに、漢字をいちいち書いているのは大変字画が多くて面倒なので、筆で書いているうちに、字体を草書体という、流れるような字体で書くようになった。かなは、そのまま書けばよいというので、だんだんに人々の間に広められていて、今のひらがなができあがった。「あ」というひらがなが「安」という漢字を草書風にして、一字一字書ききずしこのようにして完成した。空海が平仮名を創作したという伝承があるが、これは俗説に過ぎない。平仮名の元となったのは、楷書ないし行書で表現される万葉仮名である。「あ」は「安」、 「い」は「以」に由来するように、万葉仮名として使用されていた

漢字の草体化が極まって、ついに元となる漢字の草書体から独立したものが平仮名といえる。

2. 3 カタカナ

片仮名(カタカナ)は日本語の表記に用いられる音節文字である。仮名の一種で、万葉仮名を起源として成立した。元となる漢字の画数に応じて、万葉仮名をそのまま用いたり、その一部を採るなどして作られている。吉備真備が片仮名を創作したという伝承があるが、これは俗説に過ぎない。万葉仮名の省略は8世紀初めから見られるが、片仮名の起源は、9世紀初めに奈良の古宗派の学僧が漢文を和読するため、訓点として万葉仮名を付記したものに始まると考えられている。それらは余白に小さく素早く記す必要があったため、字形の省略・簡化が進んだ。片仮名はその発生より、僧侶や学者によって漢字の補助として使われることが多く、ごく初期から仮名交文に用いた例も見られる。後には、歌集や物語をはじめ一般社会の日常の筆記にも使用範囲が広がったが、平仮名で書かれたものが美的な価値をもって鑑賞されるに至ったのとは比べると、記号的・符号的性格が強い。例えば、

「キ」については「幾」の草体の変形、ならびに平仮名「き」の変形とする説もある。

「ケ」については「箇」の異体字である「个」の変形とする説もある。

「ツ」については「州」の草体、「門」の草体、または「津」の一部とする諸説がある。

「ト」については「外」の旁を採ったとする説もある。

などである。

漢語が日本で用いられるようになると、古来の日本にはなかった合拗音「クワ・グワ」「クキ・グキ」「クエ・グエ」の音が発音されるようになった。これらは[kwa][gwe]などという発音であり、「キクワイ(奇怪)」「ホングワン(本願)」「ヘングエ(変化)」のように用いられた。当初は外来音の意識が強かったが、平安時代以降は普段の日本語に用いられるようになったと

みられる。ただし「クキ・グキ」「クエ・グエ」の寿命は短く、13世紀には「キ・ギ」「ケ・ゲ」に統合された。「クウ」「グウ」は中世を通じて使われていたが、室町時代には既に「カ・ガ」との間で混同が始まっていた。江戸時代には混同が進んでいき、江戸では18世紀中頃には直音の「カ・ガ」が一般化した。ただし一部の方言には今も残っている。

漢語は平安時代頃までは原語である中国語に近く発音され、日本語の音韻体系とは別個のものとして意識されていた。入声韻尾の [-k], [-t], [-p], 鼻音韻尾の [-m], [-n], [-ŋ] なども原音にかなり忠実に発音されていたと見られる。鎌倉時代には漢字音の日本語化が進行し、[ŋ] はウに統合され、韻尾の [-m] と [-n] の混同も13世紀に一般化し、撥音の /N/ に統合された。入声韻尾の [-k] は開音節化してキ、クと発音されるようになり、[-p] も [-φu] (フ) を経てウで発音されるようになった。[-t] は開音節化したチ、ツの形も現れたが、子音終わりの [-t] の形も17世紀末まで並存して使われていた。室町時代末期のキリシタン資料には、「butmet」(仏滅)、「bat」(罰)などの語形が記録されている。江戸時代に入ると開音節の形が完全に一般化した。

仮名というのは日本人の最高の発明だと考えられる。表意文字から表音文字を作り出す作業をしたが、大変面白い文字で、どの系統でもなく、仮名文化だといえる。仮名を発明したことは日本人が日本語を表すために漢字から使ったもの、もしも仮名を漢字から作り出すことをしなかったら、まず日本文化というのはなかっただろうと思われる。

3. 言葉への影響

3. 1 飲食から見る

飲食では、毎日飲むお茶も中国が原産である。中国南方では「茶」を「テ」と発音する。また、中国の北方では「チャ」と発音する。これが北方から口

シアや中央アジアに渡り「チィ」となった。そして日本はそのまま「チャ」「茶」になった。食品で「胡」がつくのは西域から中国を経由して日本に入って来たものである。「胡椒」「胡麻」「胡瓜」などは皆そうだ。「スイカ」の語源は漢字で書けば「西瓜」である。「西瓜」の中国語の発音は「シーグア (xigua)」なのである。「西瓜」の「西」であるが、「西」の呉音は「サイ」、漢音は「セイ」で、唐音が「スイ」、これがなまれば「スイカ」となることは容易に想像がつく。草花の名前で中国伝来のものは非常に多くある。桃、栗、柿、梅などはいうにおよばず、百日紅、合歓、などもそのまま同じ文字である。目で見、手で触れるものだけではなく、精神の世界でも中国の文化は日本人に大きな影響を与えているといえる。

3. 2 習慣から見る

習慣の方面からみると、習慣のなかにも中国伝来のものは少なくない。「端午の節句」、「七夕」、「立春」、「冬至」等々沢山ある。漢字は日本のカナと違い、一字一字の意味があり、その成り立ちにも理屈がある。男と言う字は田の中で力一杯働く姿を表したものであり、「溺」と言う字は弱々しそうな女が美しく見えるようを表現している。水の中で弱ってしまったのが「溺」で、日本人は更に弱る魚の「鱸」（いわし）という字を作った。このように、その一字一字に物や現象の本質をとらえて作られたものが漢字であり、それ自身完成度の高い文化であると考えられる。中国人は漢字のもつ文化を非常に高く評価している。中国人は何千年の歴史の中で自分達こそが世界の文明の中心に位置しているという「中華思想」を、筆者は特に意識しないが、受けついで来ているのではないと思われる。

日本語の数の数え方については、中国語の数え方を採用したものである。「五十七」とか、「三千八百九十三」というのは、中国語でも同じように書く。せいぜい、「二千」などを現代中国語では、「两千」と書くなど、随所で「二」の代わりに「兩《リャン》」を用いるぐらいで、基本的に同じである（ちなみに「二」「二十」は日中共通、「二百」など三桁以上の場合、中国語では

「兩百」「兩千」となる)。もちろん、発音は違うが、現代日本語の「一《イチ》・二《ニイ》・三《サン》・四《シイ》・五《ゴー》・六《ロク》・七《シチ》・八《ハチ》・九《キュウ》・十《ジュウ》」との発音は、古代中国語の発音（いわゆる「漢音」、隋・唐時代の長安（現在の西安）周辺の発音に基づく音）に基づいている。また、いわゆる「漢文」（古代中国語）では「兩」は用いず、日本語と同じく「二」のみを使用する。このようなことは他にもあり、日本語は随所に古代中国語の表現法を残しているのである。

3. 3 古典文学から見る

古典文学方面では、「論語」「老子」「史記」など中国の古典の影響は大きなものがある。日本の元号の「平成」も史記のなかの五帝本紀に「内平らにして天成る」を参考にして作られたとされている。

中国の古典からでて、今は日常語になっているものも沢山ある。例えば、「自己啓発」の「啓発」は「論語」の「啓せずんば発せず」を縮めたものである。「完璧」や「四面楚歌」も「史記」にでてくる。以下、論語にみられるいくつかの例をあげる。

(1) 一を聞いて十を知る

孔子が、弟子の子貢（しこう）に尋ねた。

「君と顔回（がんかい）はどっちがすぐれていると思う？」

子貢が答えた。

「わたしの何が顔回よりすぐれているというのでしょうか。彼は一を聞けば十を知るすぐれた理解力をもっています。わたしは一を聞いて、なんとか二を理解するのが精一杯です。」

それを聞いて、孔子が言った。

「そのとおりだ。まったく顔回には及ばない。師匠のわたしも君と同じように顔回には及ばないのだよ。」

とても理解が早いこと、わずかなことから全部が理解できること、その力をもっている人。

<例> 彼女は、一を聞いて十を知るとても優秀な人である。

(2) 温故知新

【原文】温故而知新 = 故（ふる）きを 温（たず）ねて 新しきを 知らば

孔子は、「先人の学問や過去の事柄をしっかり研究しなさい。そこから、現実にふさわしい意義が発見できるようならば、あなたは人の師となることができるだろう。」とおっしゃったのである。

昔のことを調査、探究したり、過去に学んだことを復習して知識を深めることによって、新しい知識や道理を身につけることができる。

<例> 新しいことを始めるときには、温故知新の考え方が大切だ。

(3) 忠言は耳に逆らう 良薬は口に苦し

孔子が言った。「薬には苦いものがたくさんあります。賢い人たちはすすんで苦い薬を飲んでいきます。病気によく効くいい薬は苦い、ということを知っているからです。同じように、忠告は、耳に逆らう（つらい、という意味）もので、素直に聞き入れることは難しいけれど、自分の行動にとても役立つことが多いのですよ。」

他人からの忠告や諫めは聞くのがつらいけれど、自分のためになることが多い。

<例> 自分にとって納得のいかない話でも、忠言は耳に逆らう（良薬は口に苦し）というから聞いておいたほうがいい。

(4) 学びて思わざれば、則ち罔し

孔子は「教わることは大切なことだが、先生に頼って学んでばかりいて自分自身で考えようとしなければ本物の教養にはならない。また、自分で考えてばかりいて先生に教えを受けようとしなければ、ひとりよがりになってしまい学問の本筋を見失ってしまう危険があります。」とおっしゃったのである。

学：先生について勉強すること

思：自分で考えること

罔：道理に暗い，つまり無知であること

教えを受けるだけで，自分で考えることをしなければ，本物の知識，学問とはならない。

<例> 学びて思わざれば，則ち罔しというように，自分で自分を磨く姿勢が必要なのである。

3. 4 宗教から見る

仏教の伝播も文字の発展を促進する。仏典を翻訳するのは文字の発展に対して大いに役立つ。中国から仏教が日本に伝えられた時、教典がすべて漢訳された。仏典が漢訳される場合に、仏教の教理の中の重要な言葉は、どういう漢語に置き換えられているのかということである。例えば、仏教の基本的な真理は、サンスクリットでいえば「ボーディ」であるが、これを音訳すると「菩提（ボダイ）」となる。それに対して意味を当てて意識する場合、菩提に「道」、即ち老荘の哲学の根本概念である「道」を当てる。また仏教の究極的な境地を「涅槃」というが、サンスクリットでは「ニルバーナ」といい、これを意識すると、老荘の哲学の「道」と同義語である「無為」という言葉が当てられる。仏教の真理の担い手、つまり沙門を中国では「道人」と訳すが、これも仏教が中国に渡る以前に老荘の哲学で使われていた言葉だった。このように以前からあった老荘の哲学や用語を土台にしてインドの仏教を受け入れていった訳である。従って菩提の教えは道の教え = 道教という風に訳され、また理解されているから、現在の浄土教、特に浄土真宗系の根本教典である『無量寿経』の中には、阿弥陀如来の教えが道教と訳されている。

おわりに

中日は一衣帯水の隣国で、両国の文化の交流は悠久的な歴史をもっている。本稿は漢字伝来の起源、および日本文字への影響を説明し、飲食文化、俗習

慣、古典文学、宗教の多方面に中国文化は日本文字へ影響を与え、発展してきたことを述べた。中国の漢字は日本語の表現と日本の文化に役立ち、漢字およびそれを代表する言語の文化は計り知れない機能を発揮している。両国の長い歴史の中で、漢字という言語と文化はお互いに大きな役割を果たしている。中国文化は日本文化に対する影響に深く働き、特に文化の担当体とする言語文字として表れている。日本の文化の担当体とする日本文字を分析することによって、日本民族の文化がはっきりと分かる。言語を学び、それを中国の伝統文化に戻って考えることは、大きな意義があると考えられる。

参考文献

- [1] 石綿 敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』東京堂出版。
- [2] 稲岡耕二・水野正好・犬飼隆・和田萃 (2000) 『古代日本の文字世界』大修館書店。
- [3] 梅棹 忠夫編 (1972) 『日本文化と世界』講談社現代新書。
- [4] 叶渭渠 (2000) 『日本文化の歴史』新华出版社。
- [5] 金田一 春彦 (1991) 『日本語の特質』NHK ブックス。
- [6] 鈴木 孝夫 (1975) 『閉された言語・日本語の世界』新潮選書。
- [7] 鈴木 孝夫 (1990) 『日本語と外国語』岩波新書。
- [8] 中田祝夫・林史典 (2006) 『日本の漢字』中央公論新社。
- [9] 陳 力衛 (2001) 「和製漢語と語構成」『日本語学』
- [10] 平川 南 (2005) 『日本文字の来た道』大修館書店。
- [11] 村山 孚 (1995) 『中国人のものさし 日本人のものさし』草思社。